



(社)全高P連会報

社団法人全国高等学校PTA連合会（連絡先）〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町2-1（奥田ビル）TEL03-5835-5711 FAX03-5835-5757
 発行人 高間専逸 URL <http://www.zenkouren.org/> eメール info@zenkouren.org

第六十回全国高等学校PTA連合会大会東京大会が、「人間力を育てて作ろう 大きな輪」——家庭・学校・地域・社会——心と心をつなげよう——をテーマに八月十九日（木）から二十一日（土）まで開催された。今年は連日にわたって記録的な猛暑が続いたが、日本全国各地から一万一千五百余名のPTA会員及び関係者が参加し、熱気あふれる大会となった。



開会式風景・日本武道館

開会式においては、高校生のアトラクションが行われ、いずれの演技についても、来場者からは賞賛の声が上がった。

開会式における表彰式は「優良PTA文部科学大臣表彰」の三十二団体が表彰され、北海道帯広三条高校PTAが代表し

十九日 前日会議（国立オリンピック記念青少年総合センター）
 ・大会運営会議
 ・分科会別会議
 ・全国事務局長会議
 ・歓迎レセプション
 二十日 開会式（日本武道館）
 ・開会式
 ・表彰式
 ・基調講演
 ・分科会



基調講演・張富士夫氏

午後、安田講堂・大隈講堂・人見記念講堂などに分かれての分科会が開催された。会場へは地下鉄など公共の交通機関を使う移動だったが、お手伝いとしてスタッフに加わった大勢の協力もあって、各分科会ともほぼ予定通りの開催ができた。

て謝辞を述べた。全国大会会長表彰の個人では七十九名が、同団体表彰は八十一団体、同役員表彰では四十一名が受賞し、山口県の伊藤實氏が代表して謝辞を述べた。



表彰式・北海道帯広三条高校PTA

「いのち 輝け！」をメインテーマに、来年八月二十四日から二十三日の日程で開催される。

二十一日 閉会式（日本武道館）
 ・記念講演
 ・閉会式
 記念講演では京都大学准教授木原雅子氏が、子どもを取り巻く環境の変化から、子どもたちに失われつつある忍耐力・気力・人間力などについてとりあげて、警鐘をならされた。

全国大会 東京	1 頁	大分県立由布高等学校	
会長あいさつ・実行委員長あいさつ	2 頁	連携型中高一貫教育を基盤に、	
文部科学省祝辞・基調講演・大会宣言文	3 頁	地域振興のリーダーを育成する	9 頁
分科会報告	4～7 頁	シリーズ視点	10 頁
シリーズ青春白書 全国からの便り—輝く姿がここにある—		賠償責任制度運営委員より	11 頁
三重県立伊賀白鳳高等学校		会長事務局長会議報告・各委員会報告	12 頁
「夢を実現できるための教育システム」			
～「力」と「志」をもった職業人の育成～	8 頁		

今号の主な内容

ごあいさつ

社団法人全国高等学校
P T A連合会 会長

高間 専逸



第六十回全国高等学校P T A連合会大会東京大会を、日本の政治文化の中心地として国内はもとより、世界各地域の情報が集積し、また世界の各地にむけて発信し続けているエネルギーに充ちた首都東京において、文部科学大臣政務官、東京都副知事をはじめ多くのご来賓の皆さまにご臨席賜り、全国各地より一万一千有余の会員の皆さまにご参加いただいた盛大に開催できますことに、心より厚く御礼申し上げます。

本連合会は、昭和二十七年十一月に全国高等学校P T A協議会として発足し、以来、歴代のP T A役員各位、全国のP T A会員の皆様の、子どもたちのためにという情熱と思いから、その時代その時どきの課題を克服すべく今日まで営々と歩み続けてまいりました。本日、皆様方と共に六十回目の全国大会を東京の地で迎えることができました。このことは、本連合会にとりましては節目の大会として新たな歴史を刻むとともに、新しい時代に向けて力強い第一歩を踏み出そうとする決意の表れでもあります。本連合会は高等学校のP T A活動をとおり、家庭教育の充実を図り、家庭、学校、地域社会との連携を深めながら、子どもたちの健全育成を大きな目標とし、数々の教育課題に取り組んでいるところであります。

昨年、文部科学省の委託事業において「子どもたちの心とその背景」をテーマとして実施した全国調査の分析結果から、子どもたちのメンタルヘルスに多くの課題を抱えていることが分かってまいりました。そこで今年度は、「子どもたちのメンタルヘルスと学習意欲」を調査し、高校生の生活・意識を理解し、学校と保護者、P T A組織と地域とが協力して子どもたちのために支援していけるような提案をいたします。このような地道な活動の積み重ねが、子どもたちの健全育成に通ずるものと確信しています。

東京大会にお集まりいただきました会員の皆様におかれましては、相互に心の繋がりをもって研究協議、情報交換を行っていたいただき、都道府県市ごとの地域に持ち帰っていただき、子どもたちの応援団として活動に活かされることで、今大会が実り多きものとなることを願っております。



歓迎のことば

第六十回全国高等学校
P T A連合会大会
東京大会実行委員長

高橋 多佳子

全国高等学校P T A会員の皆様、ようこそ東京にお越しくださいました。東京都の会員一同心より歓迎申し上げます。昨年は、沖縄県の会員の皆様のホスピタリティあふれるおもてなしを受けながら、熱心に研究討議を行いました。本年はこの思いを受け継ぎ、ここ東京の地で皆様とともに語り合うことが出来ることを大変喜ばしく思います。

東京大会では、メインテーマに「人間力を育てて作ろう 大きな輪」、サブテーマに「『家庭・学校・地域・社会 心と心をつなげよう』」を掲げております。

子どもたちは、一人ひとりご家庭の大切な宝であるとともに、未来の担い手となる大切な社会の財産でもあります。超氷河期といわれる昨今の厳しい雇用環境の中でまさに巣立とうとする子どもたちには、教養、たくましさ、柔軟性が求められます。

さらには子どもたちの問題を個々の家庭や学校の問題とのみ捉えず、家庭、学校、地域が連携し社会全体で解決していくべき課題と捉える必要があると考えます。

四つの分科会において、学校教育、進路指導、生徒指導、家庭教育とP T A活動について事例発表・研究討議を行い、特別分科会では、「多種多様なタイプの学校とP T Aの取り組み・全国意見交流」と題して、課題や悩み・喜びに、生徒・学校・保護者の視点からアプローチする企画や、高校生の声を聞く企画、そして「未来を創るキャリア教育と子どもと地域を育むP T A」と題して保護者の意識高揚の一助となる企画を準備し、様々な切り口での講演、助言、パネルディスカッションなどを行います。

また、アトラクションでは、実績あるさまざまな高校生アトラクションや、バンドやダンスにも注目し発表の場を設けております。そして、大会最終日には、フィナーレにふさわしい、子どもたちと保護者が一体となつて創り上げるアトラクションを準備しております。日本武道館を震わせるような喜びを感じていただければと思います。

「子育ては親育て、まずは我々自身が育つこと」とを合言葉に、東京大会を創り上げてまいりました。参加された皆様、東京に来て本当によかつたと、歴史ある会場に足を踏み入れた感慨とともに、これからの活動につながるヒントを持ち帰っていただきますようお願いいたします。

結びに、本大会の開催にあたり、文部科学省をはじめ、東京都ならびに関係諸団体の皆様に多大なるご支援を賜りましたことに対し、心から感謝の意を表しまして歓迎のことばとさせていただきます。

祝 辞

文部科学大臣政務官

高井 美穂



報告では、高等学校を卒業するまでに、将来にわたる多様なキャリア形成に共通した能力・態度を育成指導

衆議院議員で文部科学大臣政務官の高井美穂氏からはご祝辞と合わせて高等学校等への施策について次のようなお話がありました。

■本年四月より公立高校の授業料を無償化とするとともに、私立高校においては、高等学校等就学支援金を創設し、家庭の教育費負担を軽減する制度の実施

■本年五月に高等学校PTAや安全互助会をはじめ、関係の皆様のご尽力によりまして、PTA・青少年教育団体共済法が成立



基調講演

私が学んだこと

企業が求める有為な人材とは

トヨタ自動車株式会社 会長

張 富士夫



『日本武道館』は大学時代に剣道の大会で何度も訪れたことがある、たいへん懐かしい場所です。本日のテーマに入る前に、まず、トヨタに就職してから私自身が学んだこと、経験したことを、この思い出深い日本武道館でお話しさせていただきます。

大学の法学部を卒業し、入社したトヨタで配属された部署は、自分の

希望とは遥かにはなれていました。正直言つて「こんな仕事をさせられるとは思っていません」と。しかし、「何事も勉強だ」という気持ちで取り組みことで、「失敗を恐れない」チャレンジ精神を培うことができました。また、仕事は一人でやるわけではなくチームで行うことが多く、人とのつながりを持つことでお互いを支えあうことを学び、感謝する気持ちを持てるようになりました。経験したこと

知識の仲間も増え、人として成長することができたと思います。

十年に及ぶアメリカでの経験を踏まえて、アメリカの企業が「社員を選ぶ文化」であるのに対し、「従業員は会社の宝」であるという日本企業は、「社員を育てる文化」であるといえるでしょう。そのなかで「企業が求める人材」、身につけてほしいことは、勉強以外にも理屈・理論だけでなく、実行・実践できる行動力がある者、また多くの人のなかで他人と協力しつなかりを築ける者、といえるでしょう。それは若いうちからスポーツや文化、社会貢献活動などを経験することで、

得ることができません。失敗しても恐れず、多くの経験を積むことが大切だと考えています。

高校時代から研鑽を積んだ剣道の部活、企業のチームでの仕事のなかで、人と一緒に何かをやる訓練、理屈ではなくやってみる（実践）、何事も経験である、勉強であると、悩まずに行動に移すことが身につきました。また、そう心がけて行動する中で少しずつ友人も増え、周囲への感謝の気持ちも持てるようになるのではないのでしょうか。

ひとりひとりが自分の人生を作り上げるにはその方が幸せであると考えます。

大会宣言

「人間力を育てて作ろう 大きな輪」～家庭・学校・地域・社会 心と心をつなげよう～をテーマに、ここ東京に、全国から一万有余名の会員が集い、第60回全国高等学校PTA連合会大会東京大会が開催され、大きな成果を収めた。

今、子どもたちを取り巻く環境が変わりつつある。右肩上がりの成長の時代から、停滞と変化の時代に移行し、これらは家庭に大きな影響を与え、子どもたちの生活をも揺るがしている。また、少子化に加え、インターネットの普及、孤食の増加は子どもたちの社会性に大きな影響を与えている。加えて保護者の意識の変化も見逃せない。社会性の低下、消費者意識の肥大化、放任や過干渉など不適切な子どもへの関わり方など、課題が顕著となっている。

家庭の宝であり、将来の社会の担い手である子どもたちが、自律的に社会の中で生き抜き、さまざまな関わりの中で内在する才能を開花させていくことが、我々保護者の願いである。今、子どもたちに求められるものは「生きる力」・「柔軟性」、それを支える「人間力」である。そして、これらは、家庭、学校、地域が連携する中で育まれるものである。

子育ての究極の目的は、子どもたちの精神的・社会的自立にある。我々は、PTA活動の原点に立ち返り、以下の宣言を行う。

記

1. 子どもたちの「命」と「身体」を守る。

我々はPTA活動を通して家庭、学校、地域と連携し、子どもたちの生きる力を育み、自らの「命」と「身体」を守る知識と術を身につける活動を支援する。

1. 子どもたちの精神的・社会的「自立」を促す。

我々はPTA活動を通して家庭、学校、地域と連携し、子育ての究極の目的が子どもたちの精神的・社会的自立にあることを保護者に発信し啓発活動を行う。

1. 子どもたちの育つ「場」や「機会」を支援、提供する。

我々はPTA活動を通して家庭、学校、地域と連携し、子どもたちに内在するさまざまな能力を発揮し開花させる「場」や「機会」を提供する。

1. 子育ては親育て、子どもたちが身近に接する親、保護者が自らの「人間力」の向上に努める。

我々はPTA活動を通して家庭、学校、地域と連携し、「子育ては親育て、まずは我々自身が育つこと」を自覚し、視野を広げ、自らの「人間力」を高める活動を推進する。

1. 社会的な仕組みの整備、改善、向上への働きかけを行う。

我々は、上記の活動の中で、さまざまな社会的な仕組みの整備、改善、向上が必要と判断されるものに対し、関係諸団体への働きかけを行い整備改善に努める

第60回全国高等学校PTA連合会大会東京大会において宣言する。

平成22年8月21日

社団法人 全国高等学校PTA連合会

学校教育とPTA

第一分科会

学校からの発信と親の思いを繋ぐPTA活動

於：日本武道館

学校から発信される様々な情報やお知らせを保護者にいかにつまみ、それを保護者はどう受け止めているのか？また、家庭から学校への要望や保護者としての思いはどうやって伝えたいけばよいのか？心身ともに成長していく子どもたちとのかかわりのなかで、親として学校としてPTAとして何ができるのか、保護者と良好なコミュニケーションを築いていく上で、何が必要であるか、各校からの事例発表があった。

とつても楽しい学校という環境作りについての発表があった。

愛知県立豊橋商業高等学校PTA会長原田和宣氏からは、子どもたちと積極的に関わる父母会をつくり、保護者が学校に足をはこぶよう、能動的に働きかける事が大事との報告があった。

京都府立加悦谷高等学校PTA会長吉田伸吾氏はPTA総会を年2回開催し、休日に行う事で参加者が倍増した。厳しい社会情勢の中で、このような配慮も必要になってきていると報告があった。

また「丹後ちりめん」の産地であることを生かし、二十年前から着付け教室を実施している。

沖縄県立宮古高等学校PTA会長國仲昌二氏からは、「生徒との積極的な関わり」をもっと大切にしたいという思いのもと、小さな事でも生徒と共に考え取り組んでいく中で生徒を励まし、自主性を育て、地域社会と連携し子どもたちが夢を実現できる力をつけさせるPTA活動を目標とした活動の発表があった。



各校の事例発表の後、新潟県立長岡商業高等学校PTA副会長岡田武士氏、群馬県立館林高等学校PTA会長本澤貴氏からの質問もあり、活発な質疑応答となった。

最後に法政大学准教授の宮木いつべい氏、都立田無工業高等学校の永村隆校長から、学校と保護者の関係が一方通行にならないよう「お互いの顔が見える関係」を築くこと、PTA活動に楽しさ・情熱・愛情を盛り込んで、生徒・学校・保護者を巻き込んでいく仕掛けづくりなどの助言を頂き、改めてPTAの存在意義や可能性を感じさせられた。

進路指導とPTA

第一分科会

何のための進路支援？自立への第一歩！

於：日本青年館

生徒の高校卒業後の進路先は多種多彩である。しかし、自分で決定し進んだはずの進路先を数年で退学や退職するといった現象も起きている。

この現状の中「進路指導」の重要性を再確認し、本来の「進路指導」とは何か？また、そのための「支援」としてどんな活動が行われているのかを、地域や校種の違う四校の事例発表を聞き協議した。

長野県学校法人上田学園上田西高等学校PTA会長金児充氏からは、「キャリア教育」の導入のかたちとして『地域への参画活動』『講座（現代を生きる）』『PTA進路を考える会』を実施する

ことで、生徒の進路決定の確実さ、速さ、粘り強い目標の追求に効果が現れており、学校と保護者の関係も緊密になっているという報告があった。

山梨県甲府市立甲府商業高等学校PTA会長井上和仁氏からは、『進路講演会』の新たな取り組みとして、多様な選択肢から具体的に進路を選択することができるように、『職業意識の高揚を図り、生徒の自己実現に向けてキャリア発達を支援する』という目的で『社会で活躍する同窓生から話を聞く』という事業が、生徒の感想を交え紹介された。

三重県立桑名高等学校PTA会長種村栄二氏からは、『研修旅行・大学見学』『講演会』について報告があった。フレンチのランチで楽しくコミュニケーションを図るなどの工夫をし、大学見学会への参加者増につなげたなどの話も聞くことができた。「今後、PTAとして取り組むべき課題は、如何にして高校生の置かれている現況を把握し、保護者の関心を喚



起するものである。また、高校生の地域社会とのつながりを促進することも重要である」との報告があった。

鹿児島県立鹿屋工業高等学校PTA会長杉山勝法氏からは、『講演会』などの取り組みにより保護者の進路意識を高め、また、同窓会の協力を得ながら「産業人の匠を育てる」という役目を担うPTAとして、現状の就職問題を交えた、学校と連携をとりながらの活動が報告された。

参加者からは、個々のPTA活動のヒントを得ようと質疑応答も活発に行われ、真剣な協議がなされた。

生徒指導とPTA

今、求められる規範意識とは何か？

於：東京大学安田講堂

最初の事例発表は北海道旭川西高等学校の古川勝利PTA会長の「子ども・学校の応援団としてのPTA活動」。日本最北の理数科設置校とのこと。PTA生活委員会、学校周辺の地域巡視ほか清掃活動も行い、今年には講演会「ケータイやインターネットのトラブルから子どもたちを守るために」を開催。地域で生徒の様子を見守り、規範意識はじめ高校生活に何が大切かを確認しているとの報告があった。次は、都立足立東高等学校佐伯睦子前PTA会長から『学校改革の取り組みとPTA』の発表。地元の熱い期待を担い開校した学校が、ついには

地域で廃校署名運動が行われるまでに荒れた学校となった。校長以下教職員一丸となり毎日の地道な生活指導から始め、PTAも吸殻集め、花壇づくり、地域協力で下校時声かけ等の取り組みを続け生徒生活の改善、学校改革が成された感動的な話があった。滋賀県立石山高等学校の竹川昇PTA会長からは「対話から始まるコミュニケーション」。昭和四十三年、全国でも数少ない音楽科を開設した高校。昨年、PTAのホームページを開設計画の投稿等、開かれた情報ツールを目指し活用中。



表。来年度には大津高等学校、水産高等学校、日置農業高等学校の三校を再編統合し新たな高校を作るという全国でも稀有な試みの中で、PTAも困難を乗り越え三キャンパス一つの高校としての帰属意識を持てる組織作りを目指し、生徒たちの自立や夢の実現への支援者となることを誓った。助言者からは、講師ならびに現場の経験、生徒を取り巻く環境を正しく知ることの重要性、学校と保護者間の相互理解や連携の必要性などが述べられた。

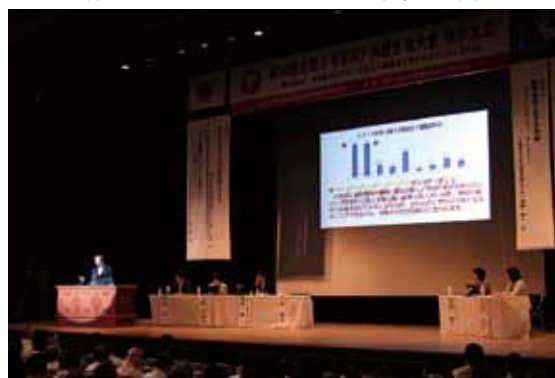
家庭教育とPTA

大丈夫！保護者が変われば子どもも変わる

於：日比谷公会堂

家庭は、子どもの生活リズム・食の大切さ、信頼に基づく人間関係・規範・社会参加の意識を育む重要な役割を担っているが、近年の核家族化、携帯電話、インターネットの普及、コンビニなどの利便性の向上など、保護者と子どもの関係は大きく変化している。本会はこの問題に焦点をあてて協議を行った。

宮城県宮城第一高等学校PTA会長、千葉博幸氏より、『我が子の「自主自律」を手助けできるように』（子供と共につつま）と題し、PTA活動の現状と取り組み状況の報告があり、親同士



の結びつきを深め学校との距離も縮め、子どもと同じ視点から物事を考え行動し子どもと共に育つことが必要だと発表された。

千葉県立土気高等学校PTA会長、海藤敬一氏より、「携帯電話に関する実態」と題し、携帯電話に関するアンケートを生徒・保護者それぞれに行い、それぞれの状況と問題点が提示された。その結果親子を対象とした携帯電話に関する講習会を開催することを働きかけ、継続的に啓発活動をしていくことで正しい知識を身に付けるとともにモラルの向上を図っていくことができた。との報告がされた。

最後に、東京都練馬区立旭町小学校校長、福田純子氏と家庭共育LABウイズ代表、太田喜子氏よりそれぞれの立場からの助言をいただいた。

学校改革に対してのPTA全国意見交流

多種多様なタイプの学校とPTAの取り組み

於：九段会館

十年前にスタートした学校改革で東京都においても新しいタイプの高校が続々と誕生している。改革を通して、生徒の状況や必要性に応じた教育の実践を通し、「生きる力」の向上を図るという目的はどの程度まで達成されたのか。そもそも学校の最も身近にいるはずの私たちPTAが学校改革についてどこまで理解できているのか。そんな問題意識を持って分科会開催に臨んだ。

東京都教育庁の星政典氏による東京都の学校改革に関する基調報告を受けて、パネルディスカッションに移行。今回はとくに東京都が全国に先駆けて着手し、全国から注

目を集めている『エンカレッジスクール』と『チャレンジスクール』の関係者を中心に協議を実施した。コーディネーターに東京都立町田工業高等学校PTA会長渡辺克己氏、パネリストに日本大学商学部特任教授天井勝海氏、東京都立秋留台高等学校校長磯村元信氏、東京都立日野台高等学校長清水一幸氏、東京都立世田谷泉高等学校PTA副会長平野栄美子氏、東京都立南平高等学校前PTA会長小紫朗氏を迎え、研究者、学校長、保護者という各々の立場から改革に対する現状認識や今後の課題が語られた。

とも制度・体制づくりにさまざまな課題を抱えつつも、生徒の学ぶ場の確保（欠席や中退の減少）、意欲喚起（学力や行動力の向上）に確実な効果を上げているということだ。しかし「体験学習やインターンシップなど自立に向けた機会確保には地域の協力が欠かせない」「改革は学校だけでは限界がある。地域・保護者とともに一体となって、子どもを育てる風土を創り上げていく必要がある」との問題提起もあつた。これまでの改革は学校現場の努力に負うところが多く、PTAから積極的にアプローチすることはなかったのが実情だ。どのような「関わり」を持つべきか、真剣に模索する時期が来ている。



高校生自らの企画運営によるディスカッション

今、子どもは何を考えているのか？親は何を思っているのか

於：早稲田大学大隈講堂

「たち」をおいた。そもそも、高校生が企画から参加した分科会が今までなかったことに疑問を持ち、新しい切り口のディスカッション形式を考えた。

第六十回全国高等学校PTA連合大会東京大会は人生に例えるなら還暦（干支が一巡し、起算点となった干支に戻る事）。原点に戻る意味において

特別第二分科会は、メインテーマを「高校生自らの企画運営によるディスカッション」今、子どもは何を考えているのか？親は何を思っているのか？とし、サブテーマに「子の考え親の思い、子の心親知らず、親の心子知らず、本音で語る子ども

も、ぜひこの機会にと発案した。ただ、現実化していく中で前途多難な問題がいくつも有ったが、生徒とともに一つ一つクリアしていった。ディスカッションする内容にしても、いろいろな意見が交錯したが、基本的な親子の觀念の違いを探るべく、生徒がアンケートを作成し実施。生徒と保護者の相違が浮き彫りとなった。それをグラフ化して基とし、ディスカッションすることになった。

この分科会の成功には、生徒やコーディネーターの活躍の他、会場の参加者の皆さんのおかげがあつたからこそのこと！参加者全員で作上げた分科会となった。この分科会から、更に生徒参加型分科会へと発展していく事に大きな期待を抱いている。



キャリア教育とPTA

未来を創るキャリア教育と子どもと地域を育むPTA

於：昭和女子大学人見記念講堂

「全国の参加者の皆さんは、「女性の品格」の著者で学長の坂東眞理子さんの昭和女子大学人見記念講堂にすっかり馴染んでおられる」との長坂理事のユーモア溢れる冒頭の挨拶に、和氣あいとした雰囲気の中、立教大学大学院准教授小島貴子氏による基調講演が始まった。

人生八十五年

年とすると、子ども時代は、その後の六十五年を生きたための大切な土台。この二十年間に「自分で自分の人生を考え、選び取る力を持つこと」が必要である。キャリア教育では「自立」が力ギとなり、その上に「働く喜び」「社会参加による精神的、社会的成長」が積み上げられる。自立は、まず家庭の子育てに



講演は、堅い話ばかりでなく、子育てや、高知の追手前高校での講演の話、大学講義で学生を自立させる様々な仕掛けの話も加わ

始まり、親は子どもの行為の「結果」ではなく、「プロセス」を認めることが成長への原動力となる。一方、日本社会は、成長の時代から成熟の時代へと移行し、働く者に求められる能力が、勤勉実直から、勤勉実直＋考える力＋周囲を巻き込む力＋好奇心へと変わってきている。経産省は組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行う上で必要とする基礎的能力「社会人基礎力」を提唱し、考え抜く力（シンキング）、前に踏み出す力（アクション）、チームで働く力（チームワーク）をその要素としたが、「感じ、考え、興味を持つ」こと「感じる力（エモーション）」を加える必要があるとした。

り、笑いあり涙ありの素晴らしい講演となった。続くパネルディスカッションでは、希望ヶ丘高等学校元校長で桜美林大学顧問の川田孝一氏、都立富士高等学校前PTA会長で教育コーディネーターを務める大島和美氏、六郷工科高等学校副校長の佐々木哲氏、牧野フライズ製作所GMの矢澤孝二氏の四名を加え、小島貴子氏をコーディネーターに、「変化」「現状」「展望」について回答頂いた。川田氏は、大学全入時代の中、AOや推薦等大学入試の多様化による学生の学力低下が懸念され、文科省は、AO選考に当たり、学習意欲、目的意識を重視するよう通達で求めている。今後、更なる高大連携の取り組みの中で、入試問題の在り方、密な高大接続等についての検討が必要とした。

佐々木氏は、バブル経済崩壊後、職業高校離れ、産業教育の必要性が高まる中、魅力ある職業教育システムとして、平成十六年に六郷工科高等学校に東京版デュアルシステムを導入。子どもたちが、企業で研修する中で、勤労観や職業観が醸成されていく様を見て、教員の意識改革にも繋がった例が紹介された。今後更なる企業や地域、様々な人達との連携を図り本システムを深めるとともに、キャリア教育として普通高校への導入期待が述べられた。また大島氏は、PTA活動に関わる中で親自身が様々な出会いの中で成長する一方、若い親世代が確実に変わってきており、親が様々なことに前向きに取り組む姿勢を見せ、真正面から子どもと向きあい、多くの人達との出会いが重要であるとした。

日本の高校生を元気にする――

高校生新聞® 高校生スポーツ®



■1993年10月創刊 ■タブロイド判 平均28頁 ■毎月10日発行(8・3月休刊)

「高校生新聞」は、高校生の活躍、分かりやすいニュース解説、生活アドバイス、勉強上達法などが満載。「高校生スポーツ」は、高校の運動部、各種大会を徹底取材し、スポーツする高校生に役立つアドバイスコラムも充実。高校生はもちろん、先生方、保護者、中学生も必読です。



高校生のための夢探し、自分探し 夢現塾
& 校内ステップアップ進学相談会
各界で活躍する講師の講演と、生徒が希望する大学・短大・専門学校の入試相談会を校内で無料開催。

首都圏で420の高校が利用

大学情報ステーション



学校をサポートする総合教育事業を展開!!

株式会社 スクールパートナーズグループ

高校生新聞社

〒194-0022 東京都町田市森野1-34-10 TEL.042-724-2750
FAX.042-724-2710 <http://www.koukousei-sinbun.co.jp>

三重県立伊賀白鳳高等学校

「夢を実現できるための教育システム」

「力」と「志」をもった職業人の育成

【学校概要】

本校は、三重県伊賀市に所在する上野農業高等学校・上野商業高等学校・上野工業高等学校が統合され平成二十一年四月に開校した三重県初の総合専門高校です。上野工業高等学校の校地内に設立され、当初二年間は上野工業高等学校生と同じ学舎で学んでいました。

工業・農業・商業・福祉の四大学科の枠をこえた、七学科十三コースが設置されている学校です。

【特色ある教育システム】

一 コース選択
その特色は、入試の時から始まります。既に、将来の夢がきまつている中学生は、七学科で募集する前期選抜で、まだ将来の夢が決まっていない

中学生は「くくり」で募集する後期選抜で受検しています。しかも七学科十三コースの「くくり」募集です。

入学後、生徒たちは二学期制で学び、前期に教科「産業技術基礎」の中で、工業・農業・商業・福祉の十三コースをすべて体験し自らのコースを決定します。そして後期より、専門の学習に入ります。様々な産業を学ぶ事を通じ、入学後学ぶコースを決めていく学校です。後期選抜で入学したある生徒は言いま

した「私には入りたいコースと夢がありました。しかし言葉でしかわからなかったので、体験したくて後期で受検しました。体験して良かったです。自分には何が向いているのか、自分の本当の夢が見つかった気がします」この生徒は、最初考えていたコースとまったく違う分野のコースに入り活躍しています。

二 総合選択制

自分の進路希望にあわせて、どのコースからでも大学進学に対応した科目、専門性を深化させる科目、地域の産業に関わる科目などが選択できる総合選択制を採用しています。

三 伊賀版「デュアルシステム」

「伊賀版デュアルシステム」と称し、全ての学科の希望生徒対象に三年次には一年間の職場体験学習を実施しています。



働くことを通じて学んでいます！

子どもたちの「夢」を大切に、決してミスマッチが起こることなく、その「夢」の実現を

支援する学校です。

【活発な部活動】

本校では、部活動を通しての人間形成にも取り組み一年次生は全員加入しています。礼儀正しき、人としてのマナー・人間関係形成能力など、そこから得るものも多く、上野工業高校時代から全国駅伝の常連校である陸上競技部を始め、運動部・文化部が統合前の伝統を受け継ぎ各方面で活動しています。



【変わっていくPTA活動】

上野工業高等学校との併設二年間は、同一敷地内で学ぶ両校生徒のことを考え、PTA組織は一体として、役員もそれぞれから選出され運営を行ってまいりました。そして、今まで、三校で実施していたノウハウを取り入れながら、新校としての特色を徐々に演出してきています。

保護者の教育活動への関心も高まってきました。

総会終了後、一年次生はコース選択について、二、三年次生は、進路指導について懇談会を開催していますが、会場一杯になる熱気あふれた会となっております。また、授業参観の際には、教室に入りきれないクラスも出てきました。



体育祭組体操！



生徒に負けません 文化祭模擬店出店

役員会では、子どもたちが、生き生きと学校生活が過ごせるよう様々な意見がだされます。その決定を受け、(総務部)・(体育・文化部)・(厚生・

指導部)・(広報部)・(会計部)に分かれた委員会活動も活発に活動し、役員・委員のみならず全会員に声をかけながら進めています。

子どもたちの安全のためのパトロール、一緒に通学電車に乗りながらの声かけ・挨拶、文化祭には模擬店出店、マラソン大会には生徒に豚汁を振るまうなど、子どもたちの「笑顔」を見るため自主的に多くの保護者が参加してくれています。



マラソン大会後の豚汁。こころと体が温まる触れ合いの機会です。

「らの便り
ここにある」vol.11

ひたすらに頑張る子どもたち。
をもって導く先生たち、
Aの仲間の姿をお伝えします。

「青春白書全国か 一輝く姿がこ

未来を見つめ、夢を追い求め、
その子どもたちを熱意
そしてPT

【学校の概況】

大分県のおへそ（真ん中）に位置する本校は、湯布院温泉で有名な由布市にある唯一の県立高校です。平成二十年一月の「後期再編整備計画」素案発表で廃校の方向性が出されたものの、由布市の三つの中学校（湯布院、庄内、挾間）との間に連携型中高一貫教育を導入して、地域の子どもを由布高校にという由布市民の熱意により、同年八月存続することが決定しました。校訓は「誠実・友愛・努力」、クラス数は九クラス、生徒数は三四〇名です。自然豊かな環境の中、生徒と教職員が一体となって勉強や部活動に生き生きと取り組んでいます。PTA、地域と連

大分県立由布高等学校

連携型中高一貫教育を基盤に、 地域振興のリーダーを育成する

携した活動も盛んで、平成二十三年度から導入される連携型中高一貫教育を基盤に、「地域に信頼・期待・愛される学校」づくりを推進しています。

【特色ある教育活動】

(1) 少人数指導とコース制
一学年は四クラス、二学年は三クラスの入学定員ですが、それぞれクラス三十人程度の五クラス、四クラスに再編成し、生徒一人ひとりを大切にする教育を行っています。さらに、全学年において、数学・英語・商業などの授業でティーム・ティーチングを実施し、少人数指導によってきめ細かな指導を行い、進学力・就職力の向上を図っています。

また、二年次からの四つのコース（国公立大学進学重点、総合進学、情報ビジネス、観光）を活用して、進学から就職まで生徒の幅広い進路ニーズに対応した指導を行っています。特に、来年度から新設される観光コ

スでは、学校設定科目の「観光学」「観光地理」などを学びます。創造力・企画力・コミュニケーション能力を育み、「由布市の新しい街づくり」について提言（研究発表）を行うことを通して、地域振興のリーダーを育成します。

(2) 地域ボランティア

生徒が行うボランティア活動には、交通安全キャンペーン、高齢者施設の清掃活動などがあります。交通安全キャンペーンは、生徒が交通安全のタスキを肩に、かけ、ドライバークに安全運転を呼びかける活動です。



交通安全キャンペーン

高齢者施設では、入所者の方々とコミュニケーションをとりながら、清掃を行っています。社会奉仕の精神を養うだけで

なく、社会生活に必要なルールやマナーを身につけています。



高齢者施設の清掃活動

【PTA活動】

(1) 多彩な活動
地域に一つの高校というところ、さらに存続が危ぶまれたこともあり、保護者の学校への関心は、由布高校の行く末にまで及ぶものとなっていました。「みんなで由布高を盛り立てよう」という熱い気持ちで随所に感じられるPTA活動を行っています。また、二年前に「おやじの会」が発足し、グラウンドの除草作業や門松作りに「おとうちゃん」の力を学校に注いでくれています。また、大龍祭（文化祭）、ロードレース（持久走大会）では、名物「大龍鍋」の炊き出しを行っています。数百人分の豚汁の炊き出しは、野菜や味噌の提供から下ごしらえと、準備段階から活気あふれる行

事となっています。



「おやじの会」による門松作り



名物「大龍鍋」の炊き出し

(2) 由布市PTA連合会との連携

「爽やかさ『笑顔・挨拶・身だしなみ』」をモットーとする生活指導の一環として、由布市PTA連合会と連携して、全市一斉「見守り登校指導」を実施しました。本校と由布市三中学校のPTA関係者及び教職員約二百名が、早朝から通学路に立ち、挨拶運動や身だしなみ指導を行いました。また、小中学生の保護者を中心に、広く市民に本校への理解を深めても

らい、由布市三中学校からの入学人数を確保するために、「由布高等学校振興大会」を由布市PTA連合会が主催しています。市長挨拶、管理職による由布高校説明に続き、保護者及び生徒からメッセージが発表され、中高一貫教育に向けた取組や成果をアピールしています。

このような様々な活動を通じて、私たち由布高校PTAは、これからも地域とつながり、子どもたちのそばで、新たな一歩を踏み出しつつある学校を力強くサポートしていきたいと思っています。

全市一斉「見守り登校指導」



「由布高等学校振興大会」

保護者負担で進む

シリーズ視点 空調設備の設置

ここ数年の夏の暑さはたいへん厳しく、特に今年の夏は、記録的な猛暑に見舞われた。高校生は、この暑さの中、空調のない教室での勉強に支障はなかったのだろうか。耐震化工事等に予算が割かれ、税収も減少し、公費での空調設備の設置は難しい状況が続いている。

私たちPTAの役割の一つに、『教育環境の整備促進』があるが、これは文字通り、『整備の促進』であり、『整備』すなわち『空調設備の設置』そのものではないはずである。しかし、ここ数年、全国各地で各学校のPTAの努力により、少しずつではあるが『保護者負担による空調設備の設置』が確実に進んでいる。そして、同時に設置が困難な学校も数多く存在し、新たな課題も浮かび上がってきている。今回のシリーズ視点は、この『空調設備の設置』について取り上げてみた。

全高P連の調査広報委員会では、平成十七年度に「公立高校における空調設備設置に関するアンケート」を実施し、会報五十五号(平成十八年九月発行)でその概要を報告している。また、過去においても、会報四十六号で「いち早く公費による設置を実施した大阪府、京都市の例」を、会報五十号で「中四国ブロックにおける実態調査結果」を報告している。これを見ても「空調設備設置」が私たちにとっていかに重大な関心事であるかがよくわかる。

さて、会報五十五号での報告によれば、平成十七年度時点で、すべて公費で普通教室の空調設備の設置を完了している自治体は、前出の大阪府、京都市以外にはほんの数ヶ所であり進んでいない。そして、設置率〇%という自治体も見受けられた。また、この報告の最後には、東京都議会で都P連から提出された「早急な空調設備設置についての請願」が全会一致で採択され、設置に向け具体的に動き出したことが伝えられており、実際に平成二十年度までに全校で設置が完了している。

このような切実な要望にもかかわらず、公費での設置が見込めない多くの自治体では、やむを得ず「保護者負担による設置」の許可を求める声が続々出てきた。学校教育法や地方財政法などの規定がある中、この「PTAの声」が徐々に行政を動かして行き、受益者負担の観点から正式に許可する自治体も徐々に増えていった。今回、この記事を書くにあたり、いくつかの県の設置状況を聞き取り調査したが、ある県では、平成十七年度時点での設置はわずか二校。交通機関の騒音問題を抱える高校だけが公費で設置されていた。もちろんこれ以前から、県への予算要望の機会には最重要項目のひとつとして、「公費での空調設備の設置」をお願いしてきたそう。特別な理由がある一方、「保護者の意見をまとめきれない」、あるいは「そもそも保護者負担ではとても無理」という学校も多い。

先日、私立高校の校長先生とお話しする機会を得た。空調設備は二十年近く前から完備していると言う。「公立高校も空調設備の設置をもっと進めて下さい。耐震化だって遅すぎます。PTA、頑張ってください。」と叱咤激励をいただいてしまった。そして、「私は私学の校長ですが、公立だとして同じ高校生。教育者として、高校生には少しでも良い環境で学んでほしいと思いますよ。」とも。「保護者負担で進む空調設備の設置」。学校単位で考えると、設置が完了すれば、一旦は解決したように見えるが、大きな視点で捉えてみると、まだまだ多くの問題が山積みなのである。それゆえ、我々の積極的な取り組みも不可欠だろう。設置や稼働条件の緩和を行政に働きかけた、未設置校へのノウハウの提供など、少しずつでも状況を変える余地があるように思う。

これからの、全国の状況を把握、分析し、すべての高校生が快適に学べる環境づくりに力を合わせていきたいものである。最後に、聞き取り調査でこんな意見もお聞きしたので紹介しておこう。

「うちの学校はスポーツに力を入れている。アスリートは体を冷やしてはいけないので、空調設備は必要ありません。」

「卒業後の就職先が、空調完備のところとは限らない。わが子には、どんなところでも力強く生きていってほしいので、設置には反対です。」

確かに……

編集後記

皆さんは、全高P連のマークの意味をご存知だろうか。この会報の二ページ、見出しの頭にあるマークだ。「全高P」の周りを九個の「P」で囲っている。これは全国九つのブロック北海道・東北・関東・東京・北信越・東海・近畿・中四国・九州のPTAの仲間がひとつになつて支え合っているという深い意味が込められているのだ。これを聞き、私も急に愛着が湧いてきた。

(調査広報委員会 長坂光司)

子どもたちの明日を守る——

～賠償責任補償制度運営委員会～

全国の高校生の **2.07人** に **1人**、
高校の **2.22校** に **1校** が加入しています。

賠償補償制度の理念は：高校生が加害者になった場合の補償の重要性については、平成十一年に会長諮問委員会から出された答申を受け、総合補償制度委員会が発足し、翌年には運営委員会が発足して、三年間に渡り真摯に検討が行われました。その結果、「全国一律に安価な掛け金で高い補償をする」「安全互助会等の既存の都道府県市高P連制度に十分配慮する」という制度理念の下、平成十四年より、本制度を導入することができました。

賠償補償制度の理念は：高校生が加害者になった場合の補償の重要性については、平成十一年に会長諮問委員会から出された答申を受け、総合補償制度委員会が発足し、翌年には運営委員会が発足して、三年間に渡り真摯に検討が行われました。その結果、「全国一律に安価な掛け金で高い補償をする」「安全互助会等の既存の都道府県市高P連制度に十分配慮する」という制度理念の下、平成十四年より、本制度を導入することができました。



自転車による重篤な事故が、全国で多発しています！

晴れの日が約7割を占める

事故が多いのは新しい学年に慣れてきた6月と行事シーズンの11月の事故が多い！

主な高額支払い事案＜単位：千円＞

年度	支払い保険金	事故内容
16年度	23,727	自転車で登校中、散歩中の女性と正面衝突し、後頭部を強打させ、重傷を負わせた。
17年度	48,495	広場で打ち上げ花火をしている途中、友人に向かって花火を発射し、顔面に直撃し片目を失明させた。
18年度	41,249	自転車で買い物に外出して帰宅する途中、路上において対向方向からきた歩行者と衝突して転倒させ頭部に外傷を負わせた。
	36,281	自転車で坂道を下っていたとき第三者と衝突転倒負傷させ、後遺障害を負わせた。
19年度	39,246	バイト帰りに自転車で走行中、散歩中の男性をはね、死亡させた。
20年度	12,883	自転車で走行中、被害者（高齢者）に衝突し、死亡させた。

高 校生の社会活動の機会もこれまで以上に増加していく状況があります。こうした中で、事故を起こさない、加害者とならないということが大切です。しかしながら加害者となれば、中には高額な賠償金を背負ってしまう事例も！全高P連賠償責任補償制度は、そんな子どもたちの将来を支援するための制度です。

(社)全国高等学校PTA連合会 後援
AIU 高校生国際交流プログラム
2011年度 参加者募集
渡米プログラム：2月14日締切
国内プログラム：4月25日締切
(参加費無料)

世界へ羽ばたく
青少年を応援します

AIU CHARTIS

AIU 高校生国際交流プログラム事務局
Tel 03-5819-8288
Email hsd@highschooldiplomats.org
http://www.highschooldiplomats.org/

MS&AD 三井住友海上

さあ来い！リスク。

リスクとトータルに戦う
総合保険ブランド[GK]

三井住友海上火災保険株式会社
〒104-8252
東京都中央区新川 2-27-2
www.ms-ins.com

TOKIO MARINE NICHIDO

地球の未来にできること。
マングローブ「海の森」づくりは、
その答えのひとつです。

東京海上日動火災保険株式会社
東京都千代田区丸の内1-2-1
〒100-8050
http://www.tokiomarine-nichido.co.jp/

保険をもっと便利に！と身近に、もしもの時にお客さまを守る
個人用自動車総合保険「ONE-Step」や
インターネットによる契約と引き先にリスクを細分化した
新・海外旅行保険「Off（オフ）」など。
あったらいいな、をカタチにする柔軟な発想ときめ細やかなサービス。
21世紀、日本の新しいライフスタイルに合った
高品質の安心を力強く、ご提供します。

日本の保険は、ジャパンが変える。

損保ジャパン

株式会社 損害保険ジャパン
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
TEL 03(3349)3111
ホームページアドレス http://www.sompo-japan.co.jp
SJ05-12524 (2006.3.1)

会長・事務局長会議報告

事務局長 北沢 好一

平成二十二年度第一回会長・事務局長会議が九月二十五日(土)・二十六日(日)にホテルビノ京都堀川において開催されました。

二十五日は午前中に第二回常置委員会(健全育成委員会・進路対策委員会・調査広報委員会・研修委員会)が開催され、午後の会議及び翌日の会長・事務局長会議で報告がありました。午後には、第二回総務委員会を受け開かれた第三回理事会で、一般社団法人移行準備について、全高P連六十周年データ整理と保存について、現行定款の一部修正について、平成二十六年全国大会が福井県で開催される予定であることなどが協議・報告され、すべて承認可決されました。

翌二十六日は会長・事務局長会議が開催され、会長の挨拶に引き続き、文部科学省社会教育課長塩見みづ枝氏(写真)の挨拶をいただき、公立高校授業料無償化及び今後の学級編成と教職員定数改善の動きなどの説明がありました。会議では、主な項目として一般社団法人移行準備の進捗状況と、賠償責任補償制度での事故概況と支払状況について説明を受けました。



各委員会報告

健全育成委員会

委員長 揚原 安磨

いよいよ委員会事業も後半に入り、具体的な展開をしております。

今年の「高校生実態調査」は全国四十五校の約四〇〇〇組の生徒と保護者を対象に回答をお願いしましたが、各協力校のご理解と協力により、生徒はほぼ一〇〇%、保護者も八〇%を超える回収率を達成することができました。木原雅子先生の継続的分析により、今年のテーマ「学習意欲」にフォーカスした、より信頼度の高い結果がレポートできると思います。皆様のご協力ありがとうございました。

この分析と報告を生で開きになりたい方は、全国五ヶ所で行っている地区シンポジウムにお越しください。最終的には、シンポジウムの結果も含め、報告書として各校にお届けしますので、是非、単Pでの活動や討論会にご活用ください。

また、「薬物乱用防止パンフレット」も、よりわかりやすくを目指して順調に改訂を進めています。来年度配布用の仕上がりをご期待ください。

進路対策委員会報告

委員長 池内 勝彦

第四回「高校生と保護者の進路に対する意識調査」をご存知ですか？お読みになったことがありますか？

全高P連では二年に一度リクルート社と共同で、高校生と保護者を対象として①親子コミュニケーションの実態②進学に関する考え③働くことに関する考え④進路にまつわる期待と不安⑤家庭教育と自立意識⑥保護者の動きと学校への要望についての意識調査を実施しています。

昨年度の第四回の報告書は、皆さんの学校に配布されています。各都道府県市の会長の皆さまには、会長会議等で内容をご報告し高い評価を頂いておりますが、残念ながら単Pの会長、役員そして保護者の皆さまには、なかなか調査結果をご覧いただけていない現状があります。

子どもへのアドバイスの難しさ、子どもから見た保護者のかかわり方についてなど、参考になる情報が多々ありますので、是非ご活用いただけますようよろしくお願いいたします。

研修委員会

委員長 松本 衆司

今年度の研修委員会は今後開催される全国大会のあり方・もち方についてのマニュアルを完成させることを第一義として活動していきます。第二回の委員会は、東京の全国大会を振り返ることから始めました。実行委員長の所感の後、研修委員会での協議が行われました。

悪いことばかりを羅列し、マイナス要素をこじ開ける様なネガティブな反省でなく、研修委員だからこそ発言できる、今後の大会運営に生かすことの出来る、前向きな意見の応酬が続く、意義のある委員会開催となりました。内容を列記すると、紙面から溢れてしまいますので、今回記載は致しませんが、全国各地から出向していただいている委員の皆様、その熱い想いが、充分に出された委員会ではなかったかと感じております。

具体的な内容の決定は、次回委員会となりますが、今の時代に即した送りマニユアルを完成させることが出来るように、力を注ぎたいと考えます。

調査広報委員会

委員長 榎原 綾子

前号(第六十七号)の中で掲載した「What's 全高P連」は、全高P連の組織や活動を、広く会員の皆さまに周知していただくのに有効であったとの意見が多く、今後より良い形で折々に掲載していきたいと思っております。また、次年度にかけての活動として、タイトル「全高P連会報」の改訂を考えています。字体やタイトルバック、会報名も含め、今後の会長・事務局長会議でアンケートを取るなど、皆様のご意見を集めながら、進めていきます。

ご協力をお願いします。今号のシリーズ「視点」で取り上げた学校における「空調設備」については、学校が子どもたちの学びの場として適した環境にあるか、という点で、今後も調査等考えていかなければならない課題と考えています。

全国大会東京大会の特集号となりました。子どもたちの素晴らしいパフォーマンスに感動した大会を思いだしていただけましたでしょうか。ご意見、ご感想をお待ちしています。